

空間の雰囲気を生かした自然環境の充実をめざして

木村 美知代
(愛知教育大学附属幼稚園)

野々宮徹 片岡比呂美 飯田恭子
中山恵子 水谷幸子 野原邦子 鎌田美千代

To Enrich Natural Environment Taking Advantage of Spatial Atmosphere

MitiyoKIMURA
(kindergarten attached to Aichi University of Education)
ToruNONOMIYA HiromiKATAOKA KyoukoIIDA
KeikoNAKAYAMA SatikoMIZUTANI KunikoNOHARA MitiyoKAMADA

要約 園内のいろいろな場の雰囲気を大切に、それぞれの場が変化に富み、偶然に様々なことが起こり、幼児が触れて楽しむ自然環境を充実したい。そのためにどのような環境を構成し、再構成したらよいか、そのポイントを事例から明らかにし、幼稚園生活の長い見通しのなかで、四季を通して自然体験ができる年間計画を実践から見つけてく。

Keywords: 空間の雰囲気 自然環境 意味ある出会い 年間計画 環境の構成と再構成 教師のかかわり

はじめに

本園は広々とした園庭に林や森などいろいろな雰囲気の空間があり、都心にありながら比較的恵まれた自然環境がある。ところが、幼児が遊ぶ姿を見つめると、広い園庭は幼児同士の触れ合いが少なくなり、園内各所の場の楽しさに気付いていないなど、必ずしも望ましい環境になっていないことが分かった。

自然環境が友達との出会いを生み、「こっちにいっぱいいるぞ」と発見した感動を友達に伝えたくなり、その思いが広がって「図鑑を見よう」と感動となって「去年のセミが戻ってきた」と戻ってくる意味ある出会いとかかわりをはぐくんでいる。このように幼児にとって身近で、毎日のように出会い、接して、自分にひきつけて感じる事ができる園庭の自然環境はとても大切である。

そこで、下記の①~③のあり方を明らかにし、主題にせまりたい。

- ①園内各所の空間のもつ雰囲気を生かし、自然とかかわりたくなる場がたくさんあるように工夫する。
- ②長期の見通しをもったビオトープ計画や飼育・栽培計画を見直し、四季を通して自然を継続して楽しむことができるようにする。
- ③意味ある出会いが生まれ、かかわりを育む体験を重ねていくことができる環境を構成するポイントを、事例の中から見つける。

- 1) 園内各所の空間のもつ雰囲気を生かし、自然とかかわりたくなる場を工夫する。

(1) 虫が育つすみかができるような環境を増やす

草の広場

[問題点] 5年前にカレーのようにトロトロになるどろんこ用の山土を積み上げた。ところが、土が踏み固められると、幼児の興味も薄れ、あまり遊ばない場になった。山に積まれた粘土質の土は辺り一帯に広がり、栄養分が含まれていないため雑草もあまり生えない。そのため虫も集まらない。

[草の広場のもつ雰囲気を生かす]

- 踏み固められて泥遊びも続かない。運動遊びには狭いこの空間がもつ意味を見つけたい。
- 雑草が伸びて幼児の背丈ほどある草のジャングルとになったら、幼児にとっては別世界になることだろう。
- 虫も集まってくるだろう。生き物を呼ぶ工夫を考えよう。
- 木の実が食べれる秘密のトンネルを作りたい。

[環境の再構成]

粘土質の土を移動する。土を耕して空気を入れる。雑草を育てる。虫を呼ぶソダ木を置くなどの工夫をする。

[幼児の変容]

- 事例① 保護者と一緒に土を運び出す。
- 事例② 5歳児が園庭の隅に置いたソダ木を動かす。



虫が止まっていることに気づき、「死んでる」と触れると、虫が動き出すので、「キャー！」と驚いて見る。虫は“ハエ”だが、意外そうだった。「ずーとここで寝ていたのね」と、ハエがここで生き続けると信じていた。教師は寒い時期にハエがいることに意外性を感じたが、幼児は動かないで生きていることを当然のように信じていた。ソダ木を通して冬越しの虫に気付く経験ができた。



事例③ 草が生えるように、保護者と再度土を耕して粘土の下にある黒い土と混ぜて土の中に空気を入れる。

事例④ 運動場横の散水栓近くへ粘土質の土を移動して小山にしたところ、幼児がプリン山と名付ける。水場が近くなったところ、「水をながせ!」「もっと深く掘るんだ!」「化石をみつけたぞ」と、自分なりに楽しい遊びを工夫して、友達と一緒にいる楽しさを感じている。



事例⑤ この地域の雑草を草の広場に、植えようと保護者に呼びかけると、登園時や降園時に草を植える姿が見られる。<考察>「どこに植えるの」「水をあげないと枯れちゃうね」など、幼児の疑問を保護者とともに解決していった。

事例⑥ 草の広場の隅の空間に、木の実がなり、木々の間を通り抜けるトンネルがあると、きっと隠れ家が続く道になったり、そこで木の実を食べたりするに違いないと考えた。2~3年先を見通してアケビとムベの苗木を植えたツタのトンネルを作った。うわさを聞いた附属中学校の先生が自宅からキイチゴの苗をもってくる。フウセンカズラのツルも伸びた。



「こっちに虫がいる」「これは、コオロギだ」「こっちは、オンバツタに違いない!」「ちがうよ。別のバツタだよ」「それじゃ、図鑑で調べよう」虫を見つけて楽しむ子や、友達や教師について歩くことが楽しい子など、それぞれの楽しみ方で、居場所になる。園内のどこにバツタやコオロギなどの昆虫がいるかに気付くようになる。「昆虫がいる場」という意味付けが幼児に定着し始める。

中 庭

[問題点]

- 3歳児だけの空間で、刺激を受けることが少ない。
- 幼児の動線が重なってぶつかりやすい。
- 中庭で、楽しそうな遊びが見られない。

[中庭のもつ雰囲気を生かす]

3歳児保育室前のこの空間は、3歳児だけの隔離された良さがあり、4・5歳児に邪魔されることなくゆったりと落ち着いて遊ぶことができる。入園当初の幼児にはなくてはならない空間である。しかし、周りの様子を見ることができるようになると、年長児の遊びに刺激を受けて、年長児のように遊びたくなってくる。そのためには、異年齢の幼児と触れ合うことができる空間づくりが必要になる。



[環境の再構成]

○プランターを集め、雑草地を囲むように置く。

[幼児の変容]

事例⑦ 虫が隠れていそうな雰囲気がかもし出され、虫探しの子が集まってくるようになる。

事例⑧ バギーカーの幼児がプランターの周囲を走るコースができる。



それを見た4歳児も、虫取りに来る。さらに、3歳児も仲間に加わる。

[草の広場や中庭の環境構成を考察する]

☆イメージを象徴する場の名前を幼児とともに考え、ネーミングをすることで共通したイメージが生まれる。

☆どの子が見ても分かるようなイメージを象徴する看板を作ると、通りかかった子がかかわってきたり自分なりの思いがふくらんだりする。

☆看板を作ることによって、継続して楽しみ方に気付かせていくことができる。

☆バツタが見つからないときは「向こうの広場へ行こう」と「草の広場」へ駆け出していくようになった。園内のどこにバツタやコオロギなどの昆虫がいるかに気付くようになり、「昆虫がいる場」という意味付けが定着する。

☆繰り返す同じ場に行ったり、楽しんだりすることで、場への愛着がわき、その場にいる友達と一緒に遊びを進めようという気持ちや、相手への親しみが増す。

☆動線が交わりあう場になるように、草の広場に道を作ったり、プリン山を作ったりしていくと、互いの

気づきを伝え合う姿がみられる。
 ☆興味をもっていることを丁寧にとらえると、幼児が学んでいる意付けが明確にできる。

ブランコの森

[問題点]

- 点々と大きな岩や記念碑の御影石が置かれている。
- 岩や老木の根が地上に張りだして転びやすいなど怪我の心配がある。
- 5歳児の裏庭になり、幼児の視線が向きにくい。常設の遊具がないためか、遊びに来たくなる楽しい雰囲気を感じられない。

[ブランコの森のもつ雰囲気を生かす]

通用門を閉鎖したため、寂しい雰囲気が漂っている。木々の間から木漏れ日が射し、夏は涼しく、小鳥の声も聞こえる。

[環境の再構成]

- チップを敷き、幼児が安全に遊ぶことができる雰囲気をつくる。
- ブランコを作って、楽しい場としての意味付けをする。
- 教師と5歳児と作ったブランコは左右の木の高さが違うので、次第に乗りにくくなる。そこで、ボーイスカウトの経験がある保護者に依頼して、立派な手作りブランコを作る。



[幼児の変容]

事例⑨ ここに行ってブランコを楽しもうと幼児が集まってくる。その中で、他の幼児が気付いた生き物に興味をもつようになる。



事例⑩ 5歳児がチップの上で思いっきりすもうを始める。

事例⑪ 「なんだこんな家！フーフーのフー！」と4歳児が始める。森の雰囲気が劇ごっこを誘い出す。

事例⑫ チップで森の雰囲気がかもし出され、キノコ屋さんごっこの遊びが生まれる。A子のキノコごはんのイメージが他の4歳児にも伝わり、同じように真似て遊びたくなっていった。B子は同じくらい大きな落ち葉は見つからなかったが、A子とキノコレストランと一緒に遊ぶかわり方を見つけて楽しんでた。プラタナスの大きな落ち葉が3



人のかかわりをはぐくんでいった。

事例⑬ 4歳児は遊びのなかでいろいろなキノコがあることに気付いていくが、5歳児は「新種のキノコ発見！」と、仲間を連れて教師を呼びにくる。興味があることを取り上げて継続してみていくことができる。4・5歳児ともに、季節毎に種類が違うキノコが生えることを知っていく。

事例⑭ 隅にソダ木を置いたところ「虫がいる」とソダをどかして腐葉土の中やソダについている虫を触るようになる。

事例⑮ ここに行けば“ミミズがいる”と、目的をもって繰り返しその場に集まって遊ぶようになった。自分が虫を集める楽しさだけでなく、動物に与えると喜んで食べることや、自分と同じようにご馳走としてミミズを食べることに気付く。

[ブランコの森の環境構成を考察する]

☆「ブランコの森」にはだれでも気軽に立ち寄れるような雰囲気がある。何かをするためだけではなく、ふとしたときに視線が会う、ゆったりとした気持ちで笑いかける、そんな幼児たちの出会いがあり、心が和む暖かいかわりが生まれる。

☆柔らかいチップが安心感を生み、力いっぱい遊べる。森の木とチップが、深い森の中の雰囲気を醸し出し、劇ごっこがしたくなる幼児の遊びを誘い出す。

☆4歳児の劇ごっこに刺激をうけて3歳児も同じように始める。動線の交わる場は、“クラスや学年を超えて共通のイメージがもちやすくなる。遊んでみようという雰囲気を醸し出し、幼児の遊びを誘い出す。

☆目的をもって繰り返し行きたくなる。同じキノコや虫をその場で集めて遊ぶことができる。

☆興味があることを継続してみていくことができる。

☆実際に見たり触れたりすることで体験的に学んでいく機会を作ることができる。

☆ソダ木が古くなるほど虫を呼び込むことができるようになった。湿気を含んだ丸太の下に虫がいることを体験的に学んでいた。

(2) 水中生物と出会うことができるようにする

池

[問題点]

- 園内に水場の環境がない。
- 池の中央に入れない。
- 大きな池にザリガニ・ヤゴ・メダカ・オタマジャクシなどを入れたくなる。それぞれの生態に応じた生き方を学ぶ機会にし



たい。

[植樹帯の雰囲気を生かす]

○クスノキやマツなどの樹木が茂り、この中で何かをしたくなる雰囲気がある。しかし、足を踏み入れる空間がないため幼児が遊ぶ空間はない。樹木の密度を少なくする必要がある。



[環境の再構成]

○植樹帯に池を作る。保護者、大学、ビオトープを守る会、地域、附属学校の協力を得て、幼児と一緒に穴を掘り、粘土をたたいて土を固め、バラシールを張って、粘土を上に乗せて叩き、畑の土を入れて作る。

○飛び石を置いた池へ変身させる。中央に立って池の様子を見るようにしたことで、より身近に池をのぞくようになる。

[幼児の変容]

事例⑯ ボウフラを見つけ、「去年見つけたボウフラが、ここに来ている」と、命の循環を感じる。

事例⑰ 「餌をやらないのに、どうしてメダカが大きくなったの」と、飼育ケースの金魚やコオロギの違いを感じる。

事例⑱ 「こんなに浮き草が大きくなったのはどうして」と、ホテイアオイやオオカナダモなどの異常に増える成長に気付く5歳児がいた。そこで気付いたことを、その場にいる友達に伝えようとする。その草をアイガモプールに入ると喜んで食べることも気付いた。



事例⑲ 4歳児は、ホテイアオイを包丁で切って、アイガモのご馳走にしようなど、友達と一緒に遊びを進めようという気持ちや、相手への親しみも増していた。

ミニ池

[環境の再構成]

水場の生き物を育てようと、大きな素焼きの瓶、アイガモのプールにしていたプラスチックケース、家庭用のプラスチック桶などを、土の中に埋め込んだ。雨水もそこに入りこんで、ミニ池になる。

[幼児の変容]

○5歳児がヤゴが住める池を探したところ、アカミミズがいる池を見つける。そこにヤゴを放して育てることにする。

○夏休みを過ぎると、「トンボになったんだよ」と、もうヤゴがいなくなったと思う幼児や、「まだヤゴが住んでいるから、えさになるメダカをやろう」と、大きな池からメダカを持ってこようとする意見が分かれる。



自分が見てきた池のヤゴやトンボの姿からミニ池のヤゴの生態を考える姿が見られる。

[池やミニ池の環境構成を考察する]

☆池やミニ池などの場が狭いので、友達と想いを伝え合いやすい良さがある。それを生かしていったところ、一緒に遊ぶ友達とのやりとりが楽しめるようになった。

☆繰り返し同じ場に行ったり、楽しんだりすることで、場への愛着がわく。

☆池の生き物の様子が目の当たりに見えるようになったので、よりよく見ようとする気持ちが育っていった。餌を与えないのに大きく育つわけを考えようとする姿から、ビオトープを肌で感じ、住んでいる生き物はここで自分と同じように大きくなることに気付いていく。

(3) 草花で遊んだり、植えたり、収穫したりの体験をすることができるようにする

花壇や畑、職員室前・保育室前のプランターなど

[問題点]

○広い園庭があるが、花壇や畑などの四季折々の花を身近に手折ることができる、種類や量が足りない。
○日当たりのよい場所が限られ、花壇や畑にする日当たりがよい場所が少ない。

[職員室前・保育室前・花壇・畑・プランターがもつ雰囲気を生かす]

○保育室前は遊びに出かける幼児が常に見れる、楽しい場の雰囲気ができる場である。

○保育室前のプランターを活用して草花や野菜を充実していく。

○職員室前は欠席連絡やアンケートボックスなど保護者の出入りも多く、目につきやすい場所である。

○花壇は畑の奥にあり、4歳児保育室の隣のため幼児の手が届きにくい。しかし、チョウが飛んでくる、イモムシがいるなど、幼児はどんな虫がいるかをよく知っている。



[花壇や畑などの環境の再構成]

- 花壇を職員室東の壁際に作り、畑を禽舎の横に造成。
- 職員室北垣根の下に洋種ヤマゴボウが育つ花壇を作る。
- 各種プランターで、四季折々に遊べる草花の栽培年間計画を立てたり、見直したりしながら作っていく。

[幼児の変容]

事例⑱ 石鹸を泡立てたアイスクリームの中にブルーベリーの実を入れてブルーベリーのアイスクリームを作る幼児が、「洋種ヤマゴボウの実がない」と友達に訴える。すると、「あっちはまだあるよ」と、洋種ヤマゴボウの実がある職員室北へ連れて行く。



園内の草花の場所が幼児に伝わり始め、作りたいものに合わせて選ぶことができる意味ある場所になり始めている。

事例⑳ 「トッピングを探しているの」と、砂場でごちそうをつくる4歳児の女児が、クスノキの黒い実やツバキの実を探していた。また、草の広場にアカイヌタデの赤い実があることや、ヒガンバナの花が咲いていることに気付いている。

事例㉑ 色水を作るなら、洋種ヤマゴボウやオシロイバナの花がよく色が出ることを知っている。抹茶や野菜ジュースはヨモギが作りやすい、「この花はきれいな色がでる」と、互いに情報交換している。

事例㉒ 「このキャベツにいる青虫は、明日になるともっと大きくなるよ」と、プランターについた青虫に、毎日キャベツやミカンの枝を与えて世話をしている。

事例㉓ ヒガンバナが咲くのを待ちかねて手折っていく。机に飾る花、匂いがいい花などに気付く幼児がいる。

事例㉔ 「このナスビをコオロギにあげてもいいですか」と、野菜が大きくなるのを待ちかねて虫に与えようとする。

ジャガイモやタマネギは自分達で味わっていたが、虫にも自分達と同じようにエサが必要なことに気付いていく。

[花壇や畑、プランターなどの環境構成を考察する]

☆色水遊びをするための草花を絶やさないように栽培すると、様々な遊びのイメージがそこから生まれる。☆花の色や性質、匂いなどを配慮した栽培計画をたててきたことが色水遊びをより楽しくする。教師自身が花に興味をもつことが大切だった。

☆他クラスからの視野を考慮しながら色水遊びの机を置いたところ、他のクラスの幼児も同じように遊んでみたい『見せたい』『見たい』気持ちが高まってきた。

た。

☆保育室前にプランターを置いたところ、花を身近に感じ、ごちそうに使う、色水や押し花など季節のイメージを遊びに取り入れようとするなどの姿が見られた。

☆畑やプランターの野菜を食べて楽しむことができたため、育てる楽しみへとつながっていった。身近な場にあることがより興味をもつことになった。

☆キャベツやパンジーなどチョウを呼ぶ野菜や花を意図的に育てたところ、青虫やさなぎ、成虫に興味を示す幼児が多くいた。指導計画に位置付けた成果が見られた。

(4) 樹木で遊ぶことができるように

ブランコの森・おばけの森・附幼の森・プリン山周辺の樹木・敷地を囲う樹木など

[問題点]

○園内に登れる木・食べれる実がなる木・虫が集まる木・鳥が来る木などがあるが、教師がその良さに気付いていない。

○クスノキ・カイズカイブキが多く、虫が嫌う木との共存が難しい。

○シイの木の実はおいしく、低い枝は木登りに最適で幼児が大好きな木である。ところが、太い根が地上に張り、降園後につまづいたり転んだり、木から落ちて根で大きなこぶをつくるなどの怪我が見られる。老木が多く、枯れ始めている木もある。

[樹木のある場の雰囲気を生かす]

○ブランコの森はミズナラやコナラなどのドングリの実がなる木やザクロの実を食べる木、桜の樹液、昆虫の卵が生みつけられる木など様々な虫が好む木が多い。

○おばけの森は、虫の嫌うクスやカイズカイブキで囲われているが、うっそうと茂った森の雰囲気がある。

○プリン山周辺は登りやすい木で、修行場の雰囲気がある。

[樹木環境の再構成]

○平成13年度末にユスラウメ・アケビ・イチジク・柿・桃・ヒメリンゴ・スモモなどの苗や種を植える。

○業者に依頼して、樹木医の診断を受け手入れをする。シイの木の根にチップを敷き詰め、根を保護するとともに、木登りする幼児がけがをしないようにする。

○教師が園内の樹木の様子をに気付く。また、蚊や毛虫などで幼児が困らないように留意する。



○保護者にも親しみがもてるように、周囲の囲いを丸太や枕木にして、ベンチのように腰掛ける場を作る。



○木登りができるようにロープやタイヤをかける。

[幼児の変容]

事例25 4歳児がチップの森に教師を引っ張り、「変なものがあるから来て」と呼ぶ。小枝で樹液をツンツンしながら「何の卵なの」と聞く。

「木の蜜だよ」と答えると、「ブニブニしてる」と触れながら柔らかさを感じる。「蜂蜜みたい」「甘いかな」「カブトムシが大好きなゼリーと同じだ」「苦そうだよ」「きつとカブトムシには甘いよ」「カブトムシ来るかな」などと、カブトムシの生態を考え、カブトムシが身近にいてほしいといった夢を描いて、自分にひきつけてイメージを広げていく。桜の樹の樹液と、ブランコの森の雰囲気がカブトムシへの親しみを深めていった。

事例26 4歳児がサクランボの実を食べるためにビールケースを重ね、5歳児がビールケースを押さえながら、「採ってやろうか」と声をかけ、4歳児は熟した実を採ろうとがんばる。5歳児の姿から4歳児が刺激を受け応援を支えに意欲が増す。

事例27 夏の間焚いてあった蚊取り線香の煙をみて、「たばこの煙みたい。きつと、虫も嫌いだと思う」と、自分がタバコの匂いを嫌いなように、虫も嫌うのだと自分に照らし合わせて考えている。

事例28 自分の力を出し切ろうとする幼児の思いが叶うような5歳児ならではの挑戦する場を幼児とともに作っていった。シノキで木登りの自信をもった5歳児が、高いケヤキに挑戦し、満足感を得ていた。

[樹木がある林や森の環境構成を考察する]

☆教師が鳥や虫を呼ぶなどの樹木の性質やそこでの楽しみ方に気付いていることが大切。

☆行く度に変化が見られるので、発見を楽しんでだれかに伝えたり、自分なりに試したりすることでさらに好奇心が高まり、何度も足を運ぶ姿が見られた。

☆同じ目的や同じ思いをもった子が集まる場所から離れた、幼児たちの動線から少し中に入ったところにあるので、他からの介入が少なく気の合う友達同士で遊びを進めようとする姿が見られた。

☆木登りができる木を幼児とともに見つけ、幼児が挑戦してできた満足感が得られる工夫を幼児とともに考えていく努力が、幼児の好奇心や意欲を高めることになった。

(5) 動物と出会うことができるようにする

ウコッケイ・ウサギ・インコの禽舎と、アイガモ牧場 保育室・みどりの広場など

[問題点]

○ニワトリ用の禽舎に、プラスチックプールを置いた旧禽舎は狭くて幼児が世話をすることができなかった。

○12年度に造った池は、アイガモが池に入って体を洗って糞をした。池の水が腐って水中生物は全滅した。

○アイガモが池にはいらないように保護者と生垣を作ったり、職員総出で網を張ったりしたが、当時のアイガモ禽舎は狭いため、当番の幼児が中に入って糞をとったり、床を洗ったりなどの世話ができない。

○保護者が育てきれない生き物を、幼稚園で飼育して欲しいと持ってくる。

保育室では場を十分確保できないことや、3歳児などの異年齢にも親しめる空間があるとよい。



[飼育物の環境の再構成]

○北側の植樹帯はツツジやニシキギ、マツやクスノキが茂って、幼児や大人が入れないアイガモの好きな植え込みがある。幼児



がアイガモを追って遊ぶことができる広さに剪定し、一部を広げて、“アイガモ牧場”に変身させた。

○幼児がアイガモに触れたり掃除をしたり餌を与えたりできるように、プールやアイガモハウスをつくる。

○保育室やホールで様々な動物を飼う。

○禽舎の動物たちと触れ合う。

[幼児の変容]

事例29 幼児たちが当番活動をするようになり、アイガモを怖がっていた幼児も抱いたり、手をたたいて追ったりすることができるようになった。5歳児の姿を見て、3・4歳児も興味をもって“アイガモ牧場”に入ったり、触ってみようとしたりする姿が見られる。動物が身近になっていると考えられる。

事例30 5歳児はカブトムシ・クワガタなど園内で捕まえた虫を飼育ケースで飼う。カメは毎年5歳児から4歳児へ、飼育のバトンタッチを



する。ハムスターは、各学級で幼児たちが大切に飼育するなど動物が身近な環境となっている。4歳児はオタマジャクシ・ザリガニ・カタツムリなど季節の生き物を各学級で飼育し、コザクラインコは入園当初から幼児に親しまれている。

事例31 遊戯室近くのホール「みどりの広場」では、カブトムシやクワガタ、スズムシを飼い、幼児たちが虫に親しむ場になっている。

事例32 ウサギがサークルにいると触れて楽しみ、散歩するウコッケイを抱くなど、様々な生き物と触れ合う。

[保育室や広場、禽舎の環境構成を考察する]



☆通園路横の“アイガモ牧場”や池シノキの囲いなどがあると、思わず知らずに降園時に遊び始めたくなる雰囲気があった。

☆幼児が世話をしようと思える“アイガモ牧場”の広さや、世話のしやすさが糞の始末や掃除へとつながった。また、エサ作りのテーブルや包丁・まな板などの準備や片付けやすさが毎日の当番活動が継続できる環境となった。

☆動線の交わる場に、“スズムシ”や“カブトムシ”の鉢などを置いて、季節や幼児たちの興味に応じた情報を発信していくと、クラスや学年を超えて共通のイメージがもちやすくなった。

☆どんな生き物がいるか看板をつける、見やすい高さのテーブルに置くなどイメージを象徴するようなものがあると、始めからイメージを重ねて話が弾んだ。

☆保育室や園庭から見える場に飼育ケースを置いたところ、いろいろな遊びをしていた子がかかわるようになり、遊びの楽しさが広がった。

2) 長期の見通しをもったビオトープ計画や飼育・栽培計画を見直し、四季を通して自然を継続して楽しむことができるようにする。

飼育栽培の年間計画を見直し、4つの年間計画を立案し、園内自然環境を改善しながら作っていく手がかりにする。

1 ビオトープ年間計画

① 草[園庭の草]年間計画1・2学期 <表—①>

カバミ ☆花を摘んで飾る茎で水車を作る・種を飛ばす
 アサギ ☆四葉のクローバー探し・王冠やプレスレット作り

カキ ☆色水遊び
 ナメ ☆フエ
 ヒメハナ ☆カンザシ、保育室などの飾り、トッピング
 ハコ ☆小鳥・ウサギ・ウコッケイなどの大好きなえさ
 ナメ ☆色水遊び
 ナメ ☆枯れた草のなかでかくれんぼをする。寝る
 ナメ ☆カンザシにする。音を楽しむ
 ナメ ☆色水を作り、お茶やジュースに見立てて遊ぶ
 ナメ ☆色水あそび
 ナメ ☆ごちそうのトッピングとしてふりかける
 ナメ ☆集めてお金にして遊ぶ
 ナメ ☆色水遊び・オシロイ取り
 ナメ ☆色水遊び
 ナメ ☆教師や友達をくすぐって遊ぶ・穂を毛虫だと思って飼育ケースに入れて遊ぶ
 ナメ ☆色水遊び・砂のごちそうのトッピングにする
 ☆ 鳥が糞を食べるのでネットで覆い幼児が遊べるように
 ナメ ☆(花) (実) ☆種の採取ハート型の種を喜ぶ
 ナメ ☆草相撲
 ナメ ☆花や葉を摘んで飾る・種を飛ばす
 ナメ ☆保育室などの飾り、ごちそう
 ナメ ☆保育室などの飾り、ごちそうのトッピング
 ナメ ☆笛を作って遊ぶ・ごちそう作り
 ナメ
 ナメ ☆保育室などの飾り、ごちそうのトッピング
 ナメ ☆ごちそう作り、ウサギのエサ
 ナメ ☆ごちそうのトッピングにする
 ナメ
 ナメ ☆保育室などの飾り ナメ ☆草相撲
 ナメ ☆種が服に引っ付くことを楽しむ

② 草(池周辺)年間計画1・2学期 <表—②>

カキ ☆青色の花 シヨウ ☆黄色の花
 ナメ ☆丈夫なミズクサ。多くなりすぎたらアイガモノエサに
 ナメ ☆メダカの卵を産卵する場所になる
 ナメ ☆ヤゴが水面から登ってトンボになるまでとまる。
 ナメ
 ナメ ☆黄色の花を咲かす
 ナメ ☆紫色の花を咲かす。多くなりすぎたらアイガモノエサにする。☆冬は水槽で育てないと全滅する。

③ 樹木年間計画1・2・3学期 <表—③>

ナメ(花) (実) ☆花びらを集める・実を使って色水遊びをしたりごちそうのトッピングに使ったりして遊ぶ
 ナメ(花) (実) ナメ(実) (花)
 ナメ ☆マツボックリを楽しむ
 ナメ(花) ナメ(花) ☆色水遊びやごちそう作り
 ナメ(実) ☆実を食べる ☆3歳児は「赤玉葱」などということを楽しむ

刈(実) ☆クリ拾い
ハコ(花) ☆ごちそう作りの調味料に見立てて遊ぶ
ハ(実)
ハコ(花) ☆部屋に飾って香りを楽しむ・ごちそう作り
ハコ(実) ☆落ち葉を集めてブーケを作って遊ぶ・葉を何かに見立てて絵にする
ハコ(実) ☆どんぐり集め、どんぐりごま・ままごとのちそうやケーキ作り、どんぐりを使って飾りを作る
ハコ(花) ☆花びら集め、ごちそう作り
ハコ(実) ☆実を採って集める・ごちそう作り
ハコ(実) ☆葉を集めて遊ぶ
ハコ(実) ☆まつぼっくり集め・まつぼっくりを使って創作する・まつ葉でごちそう作り
ハコ(実) ☆葉で王冠を作る **ハコ(実)** ☆色水遊び、もちもちの粘っこい色水ができる。柑橘系の匂いもある。
ハコ(実) ☆実を食べる
ハコ(花) **ハコ(実)** ☆花びらやさやを集めたりさやを剣に見立てて遊ぶ

④ キノコ年間計画1・2学期 <表—④>

キノコ(一年中)

2 栽培物の年間計画

- (1) 教官室東花壇 <表—⑤>
- (2) 保護者コーナーのプランター <表—⑥>
- (3) 野草園(3歳児保育室・保健室前)のプランター <表—⑦>
- (4) 畑の野菜栽培 <表—⑧>
- (5) 各保育室前のプランター <表—⑨>
- (6) まとめ<栽培物の年間計画>から幼児が楽しむ遊び方をまとめてみると次のようになる
- ☆ 色水やごっこ遊びのごちそう作りを楽しむ
 : パンジー, デージー, マリーゴールド, サルビア, チューリップ, アサガオ
- ☆ 花を摘んで花束を作る小瓶に生けて部屋に飾るなど
 : パンジー, デージー, インパチェンス, マリーゴールド, サクラソウ, キンギョソウ, ジュリアン, ゼラニウム
- ☆ 花の特徴を生かして遊ぶ(ジュース・香水作りなど)
 : サルビア, レモンバーム, ミント, パイナップルセージ, アップルミント など

- ☆ 成長や収穫を楽しむ: イチゴ, イネ
- ☆ 憩いの場としての穏やかな雰囲気作りに心がける
 : 寄せ植え(パンジー, デージー, ジュリアン, ソナリア, ムスカリ, キンギョソウ, ゼンニチソウ, パキスタス, ガザニア, アゲラタム など)
- ☆ 自分自身で世話をすることで, 植物の成長を楽しんだり収穫を喜んだりする
 : 5歳個人用植木鉢(ミニトマト, ナス, ピーマン, エダマメ, アサガオ などから1つを選んで育てる)
- ☆ チョウの成長観察・飼育
 : キャベツ(モンシロチョウ), パンジー(ツマグロヒョウモン), ニンジン(キアゲハ), ミント(シジミチョウ/ベニシジミ/ヤマトシジミ) など

3 飼育年間計画

① 飼育物の年間計画 <表—⑩>

ニワトリ 2羽	アイガモ 4羽	ウサギ 2羽
コザクラインコ	ポタンインコ 35羽	

② 昆虫の年間計画(保育室) <表—⑪>

ハムスター	キンギョ	カメ	オタマジャクシ	ザリガニ
ドジョウ	モンシロチョウ	アゲハチョウ	カタツムリ	テントウムシ
クワガタムシ	カブトムシ	(成虫・幼虫)		

③ 昆虫の年間計画(みどりの広場) <表—⑫>

スズムシ	クワガタ	カブトムシ	コオロギ
------	------	-------	------

4 環境整備年間計画 <表—⑬>

日	作業内容
4	「プランコの森」のロープの安全確認と取り付け。チップの畑を耕し、野菜類の種蒔き(ラッカセイなど)、苗の植付け。インゲンの収穫 ジャガイモの追肥と除草 夏に咲く草花の種蒔き
5	畑を耕し、野菜類の種蒔き。野菜の定植。田植え。サツマイモの植付け。エンドウ・ミツバの収穫 果樹園の害虫駆除 初夏から夏・秋にかけて咲く花の植え替え(ペチュニア・ペゴニアなど)
	以下省略

※ 各年間計画は今年度実践した内容を中心に記載。
 ※ 年間計画の一部を掲載。

3) 意味ある出会いが生まれ、かわりを育む体験を重ねていくことができる環境を構成するポイントを、実践の中から見つける。

園内各所の空間を空間の雰囲気を生かして環境構成をしたり再構成したりしてきた。その結果を(1)～(5)の視点から分析してきたところ、幼児が意味ある出会いを重ね、友達とかかわる楽しさが感じられる環境構成の要素は下記のような内容と考えられる。

ア 様々な出会いが生まれる

動線が交わりあう場を生かして作る

★みんなの動線が交わる場所に作った“池”や“ブランコの森”“スズムシの鉢”はそこで見ている様子を、他の幼児が自然に見たり感じたりすることになり異年齢や他クラスのしていることにも目が向くようになった。

★動線の交わる場から、“スズムシ”や“カブトムシ”の鉢など、季節や幼児たちの興味に応じた情報を発信していくと、クラスや学年を超えて共通のイメージがもちやすくなる。

だれでも気軽に立ち寄れるような雰囲気を作る

・何かをするためだけでなく、ふとしたときに視線が合う、ゆったりとした気持ちで笑いかける、そんな幼児たちの出会いがあり、心が和む温かいかわりが生まれる。

互いの遊びが伝わりやすくなるような工夫をする

★遊びの様子が伝わる

・どんな生き物がいるか看板をつける、見やすい高さのテーブルに置くなどイメージを象徴するようなものがあると、始めからイメージを重ねて話が弾んだ。

★場の広さ・狭さを生かす

・池やミニ池、草の広場など場が狭いことは、友達と思いを伝え合いやすい良さがある。それを生かしていったところ、一緒に遊ぶ友達とのやりとりが楽しめるようになった。

★遊びと遊びの距離に配慮する

・保育室や園庭から見える場にプランターを置いたところ、いろいろな遊びをしていた子がかかわるようになり、遊びの楽しさが広がった。

イ 繰り返し遊ぶ意欲がもてる

イメージを共有するような場の意味づけをする

・どの子が見ても分かるようなイメージを象徴する看板を作ると、通りかかった子がかかわってきたり自分なりの思いをふくらませたりした。

・草の広場やカレー山、洋種ヤマゴボウやマツボックリなど、ここに行けば“〇〇がある”“〇〇できる”と思えるものがいつも同じ所にあることで、幼児たちが目的をもって繰り返しその場で遊ぶようになった。

自分たちの場として愛着がもてるようにする

・自分たちの遊びに合う場を見つけたり、その時の幼児のイメージに合うように再構成したりしたことで、仲間と一緒に遊びを進める楽しさを感じるようになった。

・幼児たちが共通のイメージをもっている場に呼び名をつけると、場への親しみがさらに増していく。
・繰り返し同じ場に行ったり、楽しんだりすることで、場への愛着がわく。また、その場にいる友達と一緒に遊びを進めようという気持ちや、相手への親しみも増していく

4) まとめ

日々の保育のなかで環境作りをしていく教師の役割は非常に大きい。柴崎正行氏は、環境構成における教師の役割を4つの視点からあげている。

1 環境をどのように生活に取り入れていくかを伝える。

どのような環境にいつごろどのように出会うかを、幼児は知らなかったり気付かなかったりする。それらの環境に教師が積極的にかかわり、自分から生活に取り入れることにより、幼児にもそうした環境があることを伝えていくのである。

2 環境をどのように活用し、改善していくかを見せしていく。

幼稚園の中にはいろいろな環境がある。しかし、あるだけでは本当に幼児自身のものになっていかないこともある。それらをいつどのようにつかうのかを見せていき、そこで、どのような楽しい活動ができるのかを伝えていく。

3 環境には多様な意味があることを伝えていく。

環境のもつ意味は一つとは限らない。使いかたによっていくつもの意味をもつことがある。幼児と一緒に環境にかかわり、そこに多様な意味付けができることを楽しみながらそれがつたわるようにしていく。

4 環境を大切にすることの必要性を伝えていく。

教師自身の環境へのかかわり方や姿勢が問われることでもある。平成14年度本園研究協議会 講演内容より

テーマ「空間の雰囲気を生かした自然環境を目指して」の実践を振り返ると、上記の4つの視点は私達が目指してきた環境の構成の視点であり、教師の役割をあげていると思われる。

空間の雰囲気を生かそうと幼児の思いを受け止め、丸太を遊具と組み合わせ、ロープを使ったブランコやロープ渡り、木登り用のロープなど園庭の自然を生かした遊具を幼児とともに考える工夫が様々な場所に見られた。

園庭の隅の草の広場やミニ池、アイガモ牧場やブランコの森など、幼児の身近な環境となるようにを改善してきた。

また戸外の自然環境を保育室にいかに取り入れるか、教師自身が工夫を重ねた。幼児が楽しんで遊ぶことが

できる落ち葉を集めたソファや落ち葉の滑り台, 自然の素材を活かした落ち葉のポーチや壁面製作, ドングリの遊びや様々なおもちゃ作りを幼児が工夫するように, 準備や刺激などのための工夫が随所に取り入れられた。

実践のなかで, 幼児と興味・関心の対象, それを支える環境や教師・友達のかかわりが相互に関連しながら幼稚園生活が充実したものになり, 幼児の遊びが一層豊かになっていったと考えられる。

今後は, 科学的な芽生えの知的好奇心を育ててきたこれらの実践を支えに, 「幼児の学び」を明らかにしていきたい。

参考文献

- 中野区立ひがし中野幼稚園 平成11年度研究紀要
幼稚園教育要領 文部省 1998
初等教育資料 幼稚園教育年間—平成12年度版—
中沢和子他著 「保育内容環境の探求」
相川書房 1998
愛知教育大学附属幼稚園研究紀要 第30集 2001
愛知教育大学附属幼稚園研究紀要 第31集 2002